大牧広の滑稽俳句（二）

小西昭夫

前回に続いて大牧広（敬称略）の滑稽俳句を見ていく。

末席のいきいきとして鮎料理

末席に居れば会議などでも大声で意見を言うような立場にはないし、意見を求められることもない。上席の人たちへの協賛のための存在のようなものである。普段は「早く終わらないかな」と思いながら末席に連なっているのだ。職場の慰労会だろうか。昔だったら職員旅行だろうか。今日は鮎料理である。いやいや参加している会議とちがい、今日の末席のメンバーは生き生きとしているのである。可笑しいけれど真実ですよね。

四万六千日のエスカレーター長し

七月九日、十日に参詣すると四万六千日詣でた分と同じ功徳があると言われ、鬼灯市でにぎわう東京の浅草寺が有名だが、実際に参詣したのかもしれない。この句は「四万六千日」という言葉からの発想。とにかく長い時間である。デパートだろうか駅だろうか、とにかくエスカレータも長いのだ。エスカレーターに乗っている心理的時間が四万六千日なのだ。笑えるけどこの気持ちよく分かるなあ。

下戸が詠む熱燗の句のやけにうまし

苦手なものを詠んだ句が面白いことにはしばしば遭遇することがある。例えば、蛇嫌いの人の蛇の句が素晴らしいなどということとかである。苦手な人はそれだけ対象の特徴をよく観察しているのではないだろうか。同じように下戸の方は熱燗を飲む酒飲みをよく観察しているのだろう。「やけにうまい」のは下戸が作った俳句が上手いということだが、平がな書きされているだけに「うまい」が美味いと読めてしまう。熱燗が実に美味そうである。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

人の道説く初暦厠用

確かに人の道を説く先人の名言やことわざが印刷されたカレンダーがある。それは時に進むべき道を示唆してくれることもあるが、こういうカレンダーが座敷や居間にあると思うと何となく鬱陶しい。しかし、金言が並んでいるので捨てるのもはばかられる。かくてこの暦は、はばかりに置かれることになったのだ。このユーモア。

熱燗の二本分なる笑ひ湧く

もちろん、泣き上戸の人もいるが、酒は気分を高揚させ、法螺話も出るし、話も大きくなる。でも、熱燗一本ならまだ日常を引きずっているので、笑い声も小さい。熱燗も二本分なら話も大きくなるし笑い声も大きくなる。熱燗三本分になると、さてどうなるかといった想像も楽しめる。

出る釘を打ちては巣箱作り終ふ

この句は「出る釘は打たれる」ということわざを下敷きにしている。このことわざの意味は「すぐれて抜け出ているものは、とかく憎まれる。また、さしでてふるまう者は他から制裁されることのたとえ」ということである。つまり、かなり教訓的なものである。この句の面白さは、巣箱を作るときに先に打っていた釘が後から打つ釘の振動で出て来たものを打って巣箱を完成させたというだけの句意にして、教訓性を無化したところ。やるなあ、大牧さん。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。